〈巻頭言〉

環境を通しての教育

河野　重男

新しい幼稚園教育要領において、いちばん注目したいことは、総則の冒頭において幼稚園教育の基本を高らかに謳いあげていることである。

「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は、幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するよう努めるものとする。」

もともと、この「環境を通しての教育」という視点は、幼稚園教育要領に関する調査研究協力者会議による報告書『幼稚園教育の在り方について』（昭和六十一年九月）において打ち出されたものであった。そこでは、幼稚園教育の基本として四項目を挙げ、その第二に、「幼稚園は環境による教育であること」として、次のように述べていた。

「幼稚園教育の目標が有効に達成されるためには、幼児が、自発的・主体的にかかわるような環境の構成が最も大切である。その環境には、人的・物的の両要素が含まれていること及びその核をなす教師の役割について、教師の十分な理解が求められる。この場合、教師の果たすべき役割の基本は、幼児と生活をともにし、幼児との信頼関係を十分に築いて幼児の心に触れ、その発達や興味・関心の芽生えを発見し、それを育てることによって、幼児の心身の発達を適切に指導することだということができる。このような役割が実際の

指導において適切に果たされるためには、幼児の実態や地域の実情に応じて、各々の教師が自ら創意・工夫を行うことが大切になる。」

この観点からすれば、「環境を通して行う教育」は、まさしく「教師しだい」であり、「教師の心」こそが、最大の教育環境だということになる。

幼児との信頼関係を築く「教師の心」に関して、倉橋惣三のすばらしい二文を幼稚園教育関係者に訴えたい。

第一には、「驚く心」と題する一文である。

「おや、この子にこんな力が。
えっ、あの子にそんな力が。
驚く人であることにおいて、
教育者は詩人と同じだ。
驚く心が失せた時、
詩も教育も、
形だけが美しい殻になる。」

第二には、次の一文である。

「廊下で泣いている子がある。
涙はふいてやる。
泣いてはいけないという。
なぜ泣くのと尋ねる。
弱虫ねえという。
随分いろいろのことは言いもし、
してやりもするが、
ただ一つしてやらないことがある。
泣かずにいられない心もちへの
共感である。」

信頼関係を十分に築く環境を通しての教育の基本は、この「驚く心」と「共感する心」という「教師の心」にあると主張したい。

（お茶の水女子大学学長）